

か実史 波津大鶴舞・立橋天

2011/2/3 京都



文献や伝承

「標高40メートルまで到達」「若狭湾に押し寄せ」

京都府北部に残る津波の言い伝えは真実なのか。府が津波被害を記した文献を調査したところ、天橋立（宮津市）近くにある標高約40メートルの「波せき地蔵」に津波が押し寄せたという伝承や、舞鶴市で家屋被害が出たとの史料が残っていることが分かり、国に若狭湾の津波調査を求めている。真偽を確かめ、防災計画の見直しにつなげる。

日本海側では活断層規模が太平洋側より小さく、大津波は起こりにくいとされてきた。しかし、5月に吉田神社（京都市左京区）の神主が残した「兼見卿記」で、若狭湾に大津波が押し寄せたとの記述が残っていたことが明らかになり、関西電力が調査を開始した。これを受け、府も市町村や府立大などに文献や伝承津波をこの地で切り返したと伝えられる「波せき地蔵。標高40メートル地点に建つ（宮津市大垣・真名井神社）」2006年5月撮影

請要調査に、府、国

がないか調査を依頼していた。その結果、宮津市の真名井神社にある波せき地蔵に「大宝年間（約1300年前）の大津波を、ここで切り返した」との伝承が残り、江戸時代にまとめられた「丹後風土記残欠」でもほぼ同時期、大地震で舞鶴沖の島が海中に没したとの記述があった。「舞鶴市史」でも1741年、大浦半島の28軒が津波で壊れたと記されていた。1983年の日本海中部地震の時、宮津市で96センチの津波を観測したのが近年では最も大きく、津波被害はほとんどない。府の被害想定では宮津市で津波は最大80センチだが、波せき地蔵は沿岸から約500メートル、標高約40メートルの地にある。府は「文献や伝承の真偽は不明だが、東日本大震災では想定外の大津波が来た。国に科学的に分析してほしい」と話している。（竹下大輔）



